

# 動画シンボルの日常重要度に関する調査

- 日本版 PIC における静止画シンボルとの比較 -

室井 みや ・ 北神 慎司

(日本大学文理学部・島根大学法文学部)

## 【 目的 】

視覚シンボルを用いたコミュニケーションとは、具体的な事物を表すピクトグラムや、抽象性の高い動詞などのイデオグラムなどの視覚シンボルを用いて行われる AAC (補助代替コミュニケーション) の一つである。北神・室井 (2003, 教心大会) は、従来、静止画であるシンボルを、アニメーション化することによって、意味のわかりやすさが変化するかどうかを検討したところ、動画の形式のほうが、意味明瞭度が高くなるシンボルが多いことを示している。

視覚シンボルに関する基礎的なデータを収集する際、意味明瞭度という指標も重要であるが、シンボルが実際のコミュニケーション場面で使われるという特性を考慮した場合、それぞれがコミュニケーション場面において、どの程度重要であるかという指標も同程度に重要であると考えられる。そこで、本研究では、視覚シンボルの日常重要度について、静止画もしくは動画という提示形式の違いによって、日常重要度が異なるかどうかを検討する。

## 【 方法 】

**調査対象者とデザイン:** 大学生および大学院生18名。リスト (A/B) × シンボル (静止画 / 動画) の2要因計画。前者のみ被験者間要因。

**材料:** 100 語の動詞に対応する静止画シンボル 100 個と動画シンボル 100 個。静止画シンボルについては、基本的に、現行の日本版 PIC で使われているものと同じであるが、動画シンボルとの対応の関係で、一部改変した。静止画、動画とも、2 つのセット (1/2) に分割し、重複のないように、静止画と動画のセットを組み合わせて、計 100 個からなる 2 つのリスト (A/B) を構成した。

**手続き:** 調査はすべて個別により行われた。まず、モニター中央に、ある言葉が 1.5 秒提示され、続いて、それに対応する静止画もしくは動画のシンボルが一定の秒数提示された。なお、提示時間 (コマ数) は、シンボルによって異なり、静止画のシンボルは、同じ概念を表す動画シンボルの提示時間と同一とした。その後、画面には、日常重要度と意味明瞭度について、7 段階で判断するように求める教示文が継続的に提示され、調査対象者は、キーボードのテンキーを入力することで判断することが求められた。調査では、この手順が繰り返されたが、静止画と動画の提示順はランダムであり、かつ、日常重要度と意味明瞭度に対する反応の順番は、カウンターバランスされた。

## 【 結果と考察 】

シンボルのセットごとに、静止画と動画の日常重要度の平均値を Table 1 に示した。セット 1, 2 それぞれについて、 $t$  検定を行ったところ、どちらにおいても、静止画シンボルと動画シンボルの間には有意な差が見られなかった (それぞれ  $t(16)=0.28, n.s.$ ;  $t(16)=0.52, n.s.$ )。つまり、全体としては、同じ概念をシンボルとして表す際に、動画もしくは静止画の違いによって、日常重要度には差が見られない可能性が示唆された。

Table 1 日常重要度の平均値 (カッコ内は SD)

	静止画	動画
セット 1	4.53 (0.40)	4.61 (0.78)
セット 2	4.52 (0.79)	4.67 (0.40)
合計	4.53 (0.59)	4.64 (0.58)

次に、シンボルごとに、静止画と動画の日常重要度を比較し、その結果を Table 2 のように整理した。表に示されているように、ごくわずかな数ではあるが、シンボルごとに細かく見れば、例えば、Figure 1 に示したシンボルについては、提示形式の違いによって、日常重要度が異なって評定されることが示された。

Table 2 シンボルごとの日常重要度の比較

	静止画 < 動画	静止画 = 動画	静止画 > 動画
度数	2	97	1



ころぶ  
(静止画 < 動画)



生まれる  
(静止画 > 動画)

Figure 1 イデオグラムの例

本研究の材料は、林文博先生 (オフィス・スローライフ) から提供されたものです。記して感謝いたします。